

1 学校名・教科型

安芸高田市立吉田小学校 4教科型

2 学校の概要

学級数及び児童数(R6.12.1現在)

	通常学級							特支学級	合計
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計		
児童数	31	52	42	49	56	43	273	9	282
学級数	1	2	2	2	2	2	11	2	13

3 教科担任制推進教員を配置した授業計画

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	道徳	総合	学活	外国語
週当たり標準授業時数	4	1	2.9	5	3	1.4	1.4	1.7	2.6	1	2	1	2
5年1組 (担任：A)	A	B	D	推進	推進	A	B	B	C	A	A	A	C
5年2組 (担任：B)	A	B	D	推進	推進	A	B	B	C	B	B	B	C

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	道徳	総合	学活	外国語
週当たり標準授業時数	4	1	3	5	3	1.4	1.4	1.6	2.6	1	2	1	2
6年1組 (担任：C)	B	C	A	D	推進	A	D	B	C	C	C	C	C
6年2組 (担任：D)	B	C	A	D	推進	A	D	B	C	D	D	D	C

4 成果と課題

(①授業の質の向上、②多面的な児童理解、③小・中学校の円滑な接続、④教師の負担軽減、⑤その他)

<効果のあった取組>

① 授業の質の向上

担当する教科を絞り込むことで生まれる質の高い授業づくり。

たくさんの教科を一人の教諭が担当することはややもすれば粗雑に流れるきらいがあるが、教科を絞り込むことにより指導の流れを十分理解した上で、きめの細かい授業準備をした。その結果「協同学習」をベースとしつつ、分かりやすい授業を構築することができた。授業の際に掲示する資料も豊富に準備でき、子ども達はそれを手掛かりに理解を深めることができています。

② 多面的な児童理解

教科ごとに担当が変わることによって生まれる多面的な、子どものとらえ方の推進。

担当する授業の中で見える子どもの姿から子どもの個性や実態、向上した面や課題等をとらえ、それを高学年担当と共有する取組をした。

④ 教師の負担軽減

同学年複数学級の担当で生まれる授業研究に係る時間の効率化及び研究の充実。

複数学級で同じ授業をするため授業研究の時間は半分で済むことになった。その空いた時間を授業掲示物の作成等に生かした。また、初めの学級で授業をした際の反省点をもう一つの学級の授業で改善して実施することができた。



<成果>

① 5年、6年ともにテストの平均点は高く、とりわけ担当時間の多い5年生に関しては「授業で学力をつける」という指導が浸透して「学習集団」としての高まりが顕著であり、算数・理科ともに学級平均は9割を越えている。算数・理科ともに、「単元テストの平均値が80点以上の児童が85%以上」を目標として取り組んできている。二学期に関してその達成率をみると、算数は5年1組93%、2組89%、理科は5年1組89%、2組89%、6年1組100%、2組90%である。目標の達成率は100%である。

② 他の教諭と情報を共有した際に、同じとらえや異なるとらえもあった。それにより、子どもの姿を複眼的に理解することができ、指導の際に子どもの心に寄り添いながら関わるという面で活かすことができた。例えば、ノート作りがあまり丁寧でない子どもに関して、担任との連携の中で「前学年ではとれなかったノートが、とれようになったことは大きな前進である」と理解できた。そのことで評価も変わり、その子どもの心情により寄り添えるようになった。共通して課題だととらえた場合には、ある時は担任が、ある時は教科担当者が授業において個別に指導して成果を上げることができている。

④ 同学年複数学級と同教科を担当することで教科研究の負担軽減につながり、集中して一教科の授業づくりに取り組むことができた。上述したように掲示物の作成等の時間にも生かすことができた。また、Aの学級を指導して指導の課題を感じた部分をBの学級の指導の改善につなげることもできた。

<課題>

② 多面的な児童理解

教諭間の連携時間の確保と効果的な連携

児童理解を深めるために、教科担任と学級担任とが連携してきた。連携の時間は、休憩時間であったり、給食の時間であったり、放課後であったりした。このような小刻みな連携を行っていくことはお互い多忙な中で大切なことであるが、その連携が点で終わってしまうこともあった。継続的な連携を行うことで点と点とをつなげて、線にして、より効果の上がる連携にしていくことが現在の課題だと認識している。



<対策>

② 多面的な児童理解

上記の課題を克服することは指導者の意識の持ち方の問題である。隙間の時間を活用しての取組はある程度努力できており、「点と点をつなぐ」という意識をもって取り組む。点で把握した課題がその時限りに終わらない意識、解決まで点をつないでいく意識を教諭間で共有して取り組んでいく。隙間時間、高学年ブロック会を有効に活用し、共通認識して今後取り組んでいきたいと考える。まず「自分から」が大切で、自分の姿が呼び水となり課題克服の流れができるようにしたい。